

一
所
歷
日
記
增
補

乙

庫 文 閣 内
和 書 類
二 六 〇 三 七 號
五 冊
一 七 七 函 架

内 閣 文 庫	
番 號	和 26037
冊 數	5 (3)
函 號	177 983



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak



世平の系西の方く因らるひくもめくもあつふ可き
一の系このまよぬ家の所ありと後く世平の事めく
年とらるひくえつと後く此の所とすく
幸進くぬの園は松風や清の言くもくもく
まよぬひのまよぬしと同一新めくもくもく
はれくもくもく
とらるひくもくもく水の水くもくもくもくもく
國記の方業めくもくもく法山如くもくもくもくもく
同一信次如くもくもくもくもくもくもくもくもく
く外中兵の流將の増取もくもく

仁和寺らもくもくもくもくもくもくもくもくもくもく
おくもくもくもくもくもくもくもくもくもくもく
天皇道徳法皇くもくもくもくもくもくもくもくもく
西宮もくもくもくもくもくもくもくもくもくもく
くもくもくもくもくもくもくもくもくもくもく
もくもくもくもくもくもくもくもくもくもくもく
後くもくもくもくもくもくもくもくもくもくもく
事めくもくもくもくもくもくもくもくもくもくもく
みよのあつふもくもくもくもくもくもくもくもく
清盛とあつふもくもくもくもくもくもくもくもく

神護國初寺々々今傳く神護寺々々少成るを撰
法智乃子真綱は法大師止むるをさりしを傳く大所
灌頂中と灌頂中納原傍行國利寺房年叙す是を
しりし傳く神中紀傳の所傳と傳く一年の宝信と
之大師の形也と是をさりし年のもをさりしと之を
しりし傳く神護川にありし門前と傳くそれと傳く
九折とのありしと傳く西とらりしは法智川と傳
くしりしと傳くしりしと傳くのりしと傳く
法智の寺々々けりしと傳くし法智川のほとりの所
しりしと傳くのりしと傳くしりしと傳くしりしと傳く

しりしと傳くのりしと傳くしりしと傳くしりしと傳く
しりしと傳くのりしと傳くしりしと傳くしりしと傳く
しりしと傳くのりしと傳くしりしと傳くしりしと傳く
しりしと傳くのりしと傳くしりしと傳くしりしと傳く
しりしと傳くのりしと傳くしりしと傳くしりしと傳く
しりしと傳くのりしと傳くしりしと傳くしりしと傳く
しりしと傳くのりしと傳くしりしと傳くしりしと傳く
しりしと傳くのりしと傳くしりしと傳くしりしと傳く
しりしと傳くのりしと傳くしりしと傳くしりしと傳く
しりしと傳くのりしと傳くしりしと傳くしりしと傳く

しりしと傳くのりしと傳くしりしと傳くしりしと傳く
しりしと傳くのりしと傳くしりしと傳くしりしと傳く
しりしと傳くのりしと傳くしりしと傳くしりしと傳く
しりしと傳くのりしと傳くしりしと傳くしりしと傳く
しりしと傳くのりしと傳くしりしと傳くしりしと傳く
しりしと傳くのりしと傳くしりしと傳くしりしと傳く
しりしと傳くのりしと傳くしりしと傳くしりしと傳く
しりしと傳くのりしと傳くしりしと傳くしりしと傳く
しりしと傳くのりしと傳くしりしと傳くしりしと傳く
しりしと傳くのりしと傳くしりしと傳くしりしと傳く

伊く光とまじり少くともふりく化村とまじりて
切所より後極武正の庄那わたりて言目録所とまじり
且世中流くわたりてありあれと存ての建てのせり
とまじりて事とまじりて名らるるまじりて
半端く心とまじりて事とまじりて
あり日本七親者乃りて事とまじりて
とまじりて事とまじりて
一足一と大通寺通照心院よりとまじりて
之とまじりて事とまじりて
月めとまじりて事とまじりて

角ありて指と搦えまじりて
ありて桐午の事とまじりて
まじりて事とまじりて
大通寺通照心院よりとまじりて
大通寺通照心院よりとまじりて
大通寺通照心院よりとまじりて
大通寺通照心院よりとまじりて

の後皇二位のたゞし号せり毎年のたゞし号せり
塔を前より二百里の東方の麓に在りし
と云ふの傳言はるるに東寺の
廿年と桓武天皇の御宇に遷す
大師の時の善美と云ふに
東寺の由に遷す所は
其の年しに門の
ありし所を
ありし所を
ありし所を
ありし所を

中流に坐すぬは川の
梅津川
ありし所を

ありし所を

河を流るる
西に向日
伊勢人
秘伝法
山教王
後国寺

とて熱きなりく方夜夢中く異宿事くひあきまき
とく上人熱き守り事なりしおれを付一人と云ふは
西徳勝の集りく思ふとくからちと別く年此く
善く治るひく一字と書くと世事なりとくゆ
塵とゆまらる事七十餘年 堀川院の御す事
ら年く一百七十の事集りし世事と世事の如きと年
業の如き乃二の西衣木と仁法法師の御す事
ゆへ前より人のあき親書く大納言の氏若きと
とや一四派とつとみやと年人といひく唯
のい声たきと物さひくき山の事と中後事
い

似とるしりちあの方の以流をほくひに法持事
必と事思得ふ事なりとあきなりと事なりと
位なりと事なりと事なりと事なりと事なりと
老なりと事なりと事なりと事なりと事なりと
性なりと事なりと事なりと事なりと事なりと
後一書流の事なりと事なりと事なりと事なりと
親書事なりと事なりと事なりと事なりと事なりと
と外法親事なりと事なりと事なりと事なりと
町と事なりと事なりと事なりと事なりと事なりと
源の事なりと事なりと事なりと事なりと事なりと

乃其の...
~~~~~

此の...  
~~~~~

國...
~~~~~

大原

大原...  
~~~~~

乃...
~~~~~

十...  
~~~~~

十九...
~~~~~

此...  
~~~~~

此...
~~~~~











お事おめでたうと云ふはしるしに  
とらせ給ひてお事おめでたうと云ふはしるしに  
とらせ給ひてお事おめでたうと云ふはしるしに  
とらせ給ひてお事おめでたうと云ふはしるしに  
とらせ給ひてお事おめでたうと云ふはしるしに  
とらせ給ひてお事おめでたうと云ふはしるしに  
とらせ給ひてお事おめでたうと云ふはしるしに  
とらせ給ひてお事おめでたうと云ふはしるしに  
とらせ給ひてお事おめでたうと云ふはしるしに  
とらせ給ひてお事おめでたうと云ふはしるしに

お事おめでたうと云ふはしるしに  
とらせ給ひてお事おめでたうと云ふはしるしに  
とらせ給ひてお事おめでたうと云ふはしるしに  
とらせ給ひてお事おめでたうと云ふはしるしに  
とらせ給ひてお事おめでたうと云ふはしるしに  
とらせ給ひてお事おめでたうと云ふはしるしに  
とらせ給ひてお事おめでたうと云ふはしるしに  
とらせ給ひてお事おめでたうと云ふはしるしに  
とらせ給ひてお事おめでたうと云ふはしるしに  
とらせ給ひてお事おめでたうと云ふはしるしに











何れも古事なるに生かす之入たわす唐の黄蘗  
山とは一連なる寺なり唐の寺を中かたしつるが  
わくく禪師の住する所は佛の寺とて歸るが  
万葉記の云平倉院と後冷泉院永承六年建立は  
本寺也圓白頼ると云并寺の寺なり其の寺は  
草履の寺同山左名和為本院也永承行唐寺也  
公方家河之代書額在永并家院寺 四皇の寺也  
と云書額在院大昨中書院定上人 黄蘗寺万福寺  
法西院寺方治元年法元禪師在東院と云  
公方家河之代書額在永并家院寺 四皇の寺也

寺領の由

廿二日比叡山より入世長とて今も寺に在り十八  
と云く山名とてらのりて信州の山中堂と云く  
入唐の阿彌陀寺と云く院寺と云く寺に在り  
寺に在りて寺の寺に在りて寺の寺に在りて寺の  
と云く寺に在りて寺の寺に在りて寺の寺に在り  
一の寺に在りて寺の寺に在りて寺の寺に在り  
横川の寺に在りて寺の寺に在りて寺の寺に在り  
と云く寺に在りて寺の寺に在りて寺の寺に在り  
信州の寺に在りて寺の寺に在りて寺の寺に在り







たは新号、洞成屋乃後遺教伝布の化なりとの言  
りありきしむ騰部別と過てて盛行しむ後、  
漫々たる大海の一切元意有佛性、此其常信  
有変易と之流の言を新号とす、  
とまらん、  
夫を言ひて、  
一葉の多、  
大言、  
此を言ひて、  
可新号、

は程甚、  
河を、  
之を、  
店、  
世、  
又、  
新、  
と、  
前、































茶のよもぎ 意匠 和当 和當の月 和當の月  
とよは 意匠 和當 和當の月 和當の月  
とよは 意匠 和當 和當の月 和當の月  
とよは 意匠 和當 和當の月 和當の月  
とよは 意匠 和當 和當の月 和當の月  
とよは 意匠 和當 和當の月 和當の月  
とよは 意匠 和當 和當の月 和當の月  
とよは 意匠 和當 和當の月 和當の月  
とよは 意匠 和當 和當の月 和當の月  
とよは 意匠 和當 和當の月 和當の月

茶のよもぎ 意匠 和當 和當の月 和當の月  
とよは 意匠 和當 和當の月 和當の月  
とよは 意匠 和當 和當の月 和當の月  
とよは 意匠 和當 和當の月 和當の月  
とよは 意匠 和當 和當の月 和當の月  
とよは 意匠 和當 和當の月 和當の月  
とよは 意匠 和當 和當の月 和當の月  
とよは 意匠 和當 和當の月 和當の月  
とよは 意匠 和當 和當の月 和當の月  
とよは 意匠 和當 和當の月 和當の月















五段とく下てぬく果あり

廿四日かきく心童くくや

廿五日ふら雅事とくねくく

廿六日祖白あふと新をくく昌程をく

鳥行と

馬の心童やふくく可子

祖白

ゆふ花とふくく吉深

吉深

山室乃任根くまの力ぬく

昌程

かくねくくはくく其日外心ぬく

廿七日從師の方まのしきく傍山道ふの筆書

たの元慶きまのくく礎をくく

たの一字かまのくく山院世きく

くくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくく

山字とくくくくく

適照の事法のくくくくく

くくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくく







此後も後々すしし事々情々思ひし事々も  
信守守守の親をなれも思ひし事々も  
以因幡中とそありて世業師と天竺僧を後合吉平九院  
の内東少角座座座座座の印を梅檀のさる座に就き未  
世二世の座を利きのみなるに刻とて所のを容る  
海無量位徳の町東方とてさうとて形もさる人地を  
一多座の内中長地之年也因幡山に留座の海座を  
坐人洞くけく川上よとて後七年とて後く長保  
六年四月也因幡山より妙水のあり橋の年々の名は  
花事とて別とて伊國とてやとて女座とて今この

因幡山とて因幡山とて因幡山とて因幡山とて  
此の山とて因幡山とて因幡山とて因幡山とて  
二月八日とて因幡山とて因幡山とて因幡山とて  
誠の山とて因幡山とて因幡山とて因幡山とて  
とて因幡山とて因幡山とて因幡山とて因幡山とて  
是く因幡山とて因幡山とて因幡山とて因幡山とて  
此の山とて因幡山とて因幡山とて因幡山とて  
とて因幡山とて因幡山とて因幡山とて因幡山とて  
事々事々事々事々事々事々事々事々事々事々事々  
事々事々事々事々事々事々事々事々事々事々事々







やうやくかりきよのふしむの極まかり可世さひく  
極まかりゆりゆりあひのきこし佳持くあま  
ゆりあひのきこし佳持くあまゆりあひの  
ゆりあひのきこし佳持くあまゆりあひの  
ゆりあひのきこし佳持くあまゆりあひの  
ゆりあひのきこし佳持くあまゆりあひの  
ゆりあひのきこし佳持くあまゆりあひの  
ゆりあひのきこし佳持くあまゆりあひの  
ゆりあひのきこし佳持くあまゆりあひの  
教とこととまはしりよのさくら

ゆりあひのきこし佳持くあまゆりあひの  
ゆりあひのきこし佳持くあまゆりあひの  
ゆりあひのきこし佳持くあまゆりあひの  
ゆりあひのきこし佳持くあまゆりあひの

ゆりあひのきこし佳持くあまゆりあひの  
ゆりあひのきこし佳持くあまゆりあひの  
ゆりあひのきこし佳持くあまゆりあひの  
ゆりあひのきこし佳持くあまゆりあひの

ゆりあひのきこし佳持くあまゆりあひの  
ゆりあひのきこし佳持くあまゆりあひの  
ゆりあひのきこし佳持くあまゆりあひの  
ゆりあひのきこし佳持くあまゆりあひの  
ゆりあひのきこし佳持くあまゆりあひの  
ゆりあひのきこし佳持くあまゆりあひの  
ゆりあひのきこし佳持くあまゆりあひの  
ゆりあひのきこし佳持くあまゆりあひの  
ゆりあひのきこし佳持くあまゆりあひの  
ゆりあひのきこし佳持くあまゆりあひの



其いふことしるふとせむ

二月朔日未だ出づと暇少部とあはれん  
海を渡り楳<sup>ヒツ</sup>の島と渡り休る少くは  
けしきあはれしとあはれしと  
未だ句くえねる無深き島少くは  
本を括くくつる少くあはれしと  
しるふことしるふとせむ

長深の島楳<sup>ヒツ</sup>の島か  
ゆり少くはあはれしと  
乃あはれしとあはれしと

しるふことしるふとせむ

楳<sup>ヒツ</sup>の島とあはれしと

よはつてあはれしとあはれしと  
よはつてあはれしとあはれしと

山を登り人少くはあはれしと  
山を登り人少くはあはれしと  
山を登り人少くはあはれしと  
山を登り人少くはあはれしと  
山を登り人少くはあはれしと  
山を登り人少くはあはれしと  
山を登り人少くはあはれしと  
山を登り人少くはあはれしと  
山を登り人少くはあはれしと  
山を登り人少くはあはれしと



ちいしは紅雲付と云ふ花は梅と云ふ花の  
昔もあまをいほむ都に内舎人あり人井井の  
あまをいほむ都に内舎人あり人井井の  
あまをいほむ都に内舎人あり人井井の  
あまをいほむ都に内舎人あり人井井の  
あまをいほむ都に内舎人あり人井井の  
あまをいほむ都に内舎人あり人井井の  
あまをいほむ都に内舎人あり人井井の  
あまをいほむ都に内舎人あり人井井の  
あまをいほむ都に内舎人あり人井井の  
あまをいほむ都に内舎人あり人井井の

異前の子と云ふ花は水底の草と云ふ花の  
啼きあふ鳥の能くかきまじりし流し水も  
しきすくすく水底の草と云ふ花の  
玉の草と云ふ鳥の能くかきまじりし流し水も  
梅の草と云ふ鳥の能くかきまじりし流し水も  
あまをいほむ都に内舎人あり人井井の  
あまをいほむ都に内舎人あり人井井の  
あまをいほむ都に内舎人あり人井井の  
あまをいほむ都に内舎人あり人井井の  
あまをいほむ都に内舎人あり人井井の

あまをいほむ都に内舎人あり人井井の  
あまをいほむ都に内舎人あり人井井の  
あまをいほむ都に内舎人あり人井井の  
あまをいほむ都に内舎人あり人井井の  
あまをいほむ都に内舎人あり人井井の  
あまをいほむ都に内舎人あり人井井の  
あまをいほむ都に内舎人あり人井井の  
あまをいほむ都に内舎人あり人井井の  
あまをいほむ都に内舎人あり人井井の  
あまをいほむ都に内舎人あり人井井の



此階の石段を築くものより中二層の石段を築くもの  
より解石寺云文永年中つく其西舟無かり  
後新門のけり延徳二年六月廿亥院一階門  
付おろかり文殊もは古し一切経藏へも  
万葉小云般若寺を武帝所建と云山記  
傍西舟寺と云文殊并傍西舟の作る所なり  
大塔宮内所と徳れ一お般若経今も寺  
律系し  
新くとも此垣と御住保川とつらふもの  
信の化と云れと信備寺お大門の前と云東

西舟同南北早河系は昔此のそらゆ積を築く此の  
月と舟と云るもの西舟は初よりその  
信を敷くもの西舟は初よりその  
信の化と云るもの西舟は初よりその  
天皇系舟の信を敷くもの西舟は初よりその  
水を知舟の信を敷くもの西舟は初よりその  
舟と舟と云るもの西舟は初よりその  
舟と舟と云るもの西舟は初よりその

信のいふれは此の舟と云るもの西舟は初よりその  
か〜西門河と云るもの西舟は初よりその



二〇〇〇子とまじ旅指く必前よりそとかりし程も  
今もあつりハ昔の如くまの西のちんちんあつる  
ゆふあしあつる如くしつと清くしつとあつる  
任ふれあつる思ふ所のまのまのまのまのまの  
まのまのまのまのまのまのまのまのまのまの

みづの如くあつるまのまのまのまのまのまのまの  
河津の如くあつるまのまのまのまのまのまのまの  
物澤の如くあつるまのまのまのまのまのまのまの  
まのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまの  
まのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまの

一〇〇〇子とまじ旅指く必前よりそとかりし程も  
今もあつりハ昔の如くまの西のちんちんあつる  
ゆふあしあつる如くしつと清くしつとあつる  
任ふれあつる思ふ所のまのまのまのまのまのまの  
まのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまの  
まのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまの







此の由最中地と汁體初は為行自相違をそとて是も載  
ゆは其是非と知るとときと案紀年二二部ありて心身の様  
集り規式多し其外七所いふと多しとありて  
まじり東大寺とありて世寺とて心身の寺の所一人聖武天皇  
の所願を辨信心並刺入天平十七年八月事記をして  
門子若孫天皇の御宇天平勝室二年送平とありて  
首尾七十年二二月堂二月堂四月事とありて其月記  
その由事ありてかくしよとて二月事のありて其由を  
并てその其由を平のありて秋の實たに其由の徒多し  
此年の内院と作を平とて甲戌の年の所記とありて

堂名観音院と稱してけり其由忠行法のありて  
ありて其由傳まじり此法を人と思ひてとて其由を  
常ありて此のありて辨別此法の所記とありて同解義の  
法ありて其由此のありて其由とありて其由大智の信念  
ありて其由忠行のありて其由七寺の所記とありて  
人のありて其由とありて帝を同とありて其由ありて  
素院と建りて其由とありて其由二年二月初とありて  
對りて其由とありて其由とありて其由とありて其由  
其由とありて其由とありて其由とありて其由とありて  
其由とありて其由とありて其由とありて其由とありて











劔之初許台命とひく初法一途河下流寺  
少情言有花とふか一少半後思之  
初前念初後以宝ありと細之をく中く是昔二粒  
之一点開老得山竹をく之中言百廿月又大徳  
少許を思ふと百月とく

く初とく口梅山無梅寺とく世寺と大徳討法  
昔のくはりの少く白雉二年く山城國六階の字  
少少刻とく少く少階寺と云史后寺と  
初く之の少く初初之寺と石以寺の初  
初く少く少く初初とく東の寺と云建く寺

少寺くく少河下無武天皇東の寺と云建く寺  
少寺くく少少河下無武天皇東の寺と云建く寺  
少寺くく少少河下無武天皇東の寺と云建く寺  
少寺くく少少河下無武天皇東の寺と云建く寺  
少寺くく少少河下無武天皇東の寺と云建く寺  
少寺くく少少河下無武天皇東の寺と云建く寺  
少寺くく少少河下無武天皇東の寺と云建く寺  
少寺くく少少河下無武天皇東の寺と云建く寺  
少寺くく少少河下無武天皇東の寺と云建く寺  
少寺くく少少河下無武天皇東の寺と云建く寺







親なる中將の忠告を以て

法衣藏の事と定難の國を以て守るに志ありて  
中將の忠告を以て禁を以て守るに志ありて  
中將の忠告を以て守るに志ありて

中將の忠告を以て守るに志ありて  
中將の忠告を以て守るに志ありて  
中將の忠告を以て守るに志ありて  
中將の忠告を以て守るに志ありて  
中將の忠告を以て守るに志ありて  
中將の忠告を以て守るに志ありて  
中將の忠告を以て守るに志ありて  
中將の忠告を以て守るに志ありて  
中將の忠告を以て守るに志ありて  
中將の忠告を以て守るに志ありて

中將の忠告を以て守るに志ありて  
中將の忠告を以て守るに志ありて  
中將の忠告を以て守るに志ありて  
中將の忠告を以て守るに志ありて  
中將の忠告を以て守るに志ありて  
中將の忠告を以て守るに志ありて  
中將の忠告を以て守るに志ありて  
中將の忠告を以て守るに志ありて  
中將の忠告を以て守るに志ありて  
中將の忠告を以て守るに志ありて

中將の忠告を以て守るに志ありて























